

【第十四回】「毛筆学習の発展」

— 学びの指標（段位認定試験を生かす2 / 楷書の倣書） —

静岡大学教授
本誌手本揮毫者

杉崎 哲子

◇はじめに

「臨書」が書道学習の基本であることは、繰り返してお伝えしてきました。そして、「形臨」から段階的に学習を進めていくという一般的な流れについても、既に「承知のこと」と思います。

特に楷書という書体では「形」を捉えることが重要になるため、今回は点画を構成する原理の違いを確認しました。

今回は六段の楷書課題の傾向をもとにして、「倣書」について解説していきます。

■臨書学習の意義を確認する

まず、「臨書」の意義や段階的な学習の進め

方について、確かめておきましょう。

「普遍性や客観性のある古典・古名跡を「臨書」する場合、その目的によって多少方法が異なります。

〈臨書の主な目的〉

- ① 創作の手がかりを得るため
- ② 書美の理解・鑑賞のため
- ③ 表現技術習得のため
- ④ 趣味・修養のため

《参考》『書写・書道用語辞典』第一法規

はじめに「形臨」をして、その古典点画の構成原理（均斉と均衡）をおさえながら、用筆法（露鋒・藏鋒、直筆・側筆など）の特徴を学び、古典の特徴を理解し、その技法を習得できるようにします。その後、「意臨」「背臨」を、さ

らに「倣書」へと発展的に進めるのが、「臨書」を創作への過程として捉えた場合（目的①）の一般的な学習の流れだといわれています。

また、古典を直感的に捉え、その特質を臨書する「印象的臨書」からはじめ、次に「写實的臨書」で忠実に字形を捉えることに努めたら、最後に線質に主観を加えて「表現的臨書」に進むという三つに区分する考え方も、示されています。

こうした流れについて書家・石川九楊先生は、「創作を重視し臨書を創作の手段と捉える考え方」であると指摘し、次のように記されています。

「：書を見た時、まず最初にその書の世界全体を感じて受け止めるはずですが。その意味では、臨書はすべて『意臨』だといってもいいくらいです。『意』と『形』を分離することは不可能

です。『意』は『形』の中にあり、『形』は『意』に支えられて存在するのです。そして『形』を含む書全体に対するのが、臨書という行為です。…

(参考) 『墨・臨書入門』芸術新聞社、一九九四年十二月増刊号)

石川先生は、「臨書とは、『言葉(文字)』として書かれた『筆触』を読み、それを再現すること」と強調されています。それは、「その文字がどのような筆順、力、深さ、速度で書かれたかという書かれ方を考えて書く」という臨書学習の重要な心得を示すものです。

■ 段位認定試験における臨書課題の発展

本誌・段位認定試験の楷書課題の傾向を見ると、五段までは「臨書」となっており、段位に応じた学ぶべき内容(点画の構成原理と用筆法)を系統的に精選し、それらの特徴を有した古典が出題されています。

試験としての「臨書」ですから、前頁の目的に当てはめるならば、③の「表現技術の習得」の程度が審査され、①に関わるといえましょう。その時に、小手先だけで器用に形を似せるのではなく、「形」の中に「意」を捉えた臨書が求められることを十分に意識して取り組む必要があります。

ここで、最近の段位認定試験の傾向を見ていくと、六段の課題は、楷書、行書、草書いずれにおいても、「倣書」という形で語句を指定して出題されています。

六段位認定試験「楷書・行書・草書」課題例

年度	楷書	行書	草書
平成28年度	倣書 秋風落日斜	倣書 花明五嶺春	倣書 眠雲臥石
平成27年度	倣書 登樓萬里春	倣書 落日松風起	倣書 桃花流水
平成26年度	倣書 秋風入窗裏 (窓)	倣書 明月來相照 (來)	倣書 雨香雲淡
平成25年度	倣書 茶烟永日香	倣書 國破山河在	倣書 先憂後樂 (樂)
平成24年度	倣書 微雨濕花來	倣書 黃河入海流	倣書 漱石枕流

■ 「倣書」とは

「倣書」とは、古典(碑文や法帖)から感じられる結体・結構や性情を基にし、古典とは別の文字を素材として作品をつくることをい

ます。「臨書学習」の発展的な位置づけの高度な段階であり、創作の導的な段階といわれていますが、積極的に特定の古典にヒントを得て、その用筆法や字形や線質を利用して書くため、「古典を応用した創作」といい換えることもできます。

「臨書は模倣だから楽だ」とか「創作は完全な独創や主観で成り立つ」という思い違いをしている人がいるかもしれませんが、自分の意図にあった独自の書風をゼロから新たに確立して作品を作ることなど、できるはずがありません。古典の鑑賞や臨書で学んだ知識や技能を生かして作ることも創作に含まれます。というより、それが創作なのです。

石川先生は、臨書は他者と格闘しながら他者とのずれを吸収して自分の規範を作っていく作業であり、創作はそうした歴史と表現の学習の延長上にある「臨書を拡張したもの」といわれています。

その意味で、「倣書」は、臨書学習を通して徐々に作り上げてきた自分の規範を生かした自分自身の表現といえるでしょう。

■ 楷書の「倣書」課題に取り組む

「倣書」では、まず、出題された語句について、

基にする古典を決める

(例) 九成宮醴泉銘

臨書学習

出題語句を字典で調べる

(『角川書道字典』使用の場合)

(課題語句例)

「開心見誠」

(出典・『後漢書』「馬援伝」)

九成宮「心」

九成宮「誠」

心

誠

九成宮「開」の門構え 皇甫誕「開」

開

開

皇甫誕「見」

九成宮「視」

見

視

字形・線質など

古典の特徴を確かめ、捉える

(例) 九成宮醴泉銘の特徴は?

外形は? 背勢が強い?

書きまとめ方に気をつけて書く

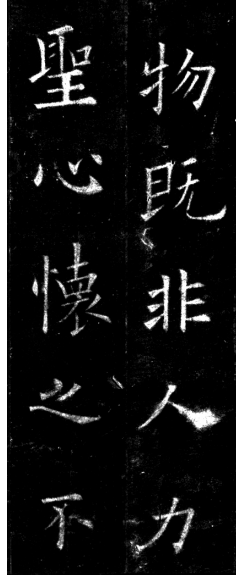
(用紙…画仙紙・ハッチ)

どの古典をヒントにして書くのかを、明確にして取り組む必要があります。その際には、これまで競争や段位認定試験に向けて取り組んできた楷書の古典から選ぶのが賢明といえます。なぜなら、選んだ古典の特徴をしっかりと捉えていることが大前提だからです。

それでは「九成宮醴泉銘」を基にして「開心見誠」という語句を做書する場合を例に、手順をお伝えしましょう(上図参照)。

まず、手元にある字典(『角川書道字典』角川書店を使用)で調べたところ、「心」と「誠」は、「九成宮醴泉銘」の文字が載っています。そこで、「九成宮」の作者である欧陽詢の

九成宮醴泉銘



皇甫誕碑



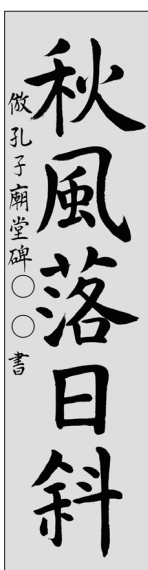
「皇甫誕碑」の「開」や「見」を参考にすることにします。ただ、そのまま使ってしまうのは危険なので、文字を構成する部分が同じである「九成宮」の文字「開」と「皇甫誕」の「開」の文字とを比較してみるのです。

すると、「皇甫誕」よりも「九成宮」の方が文字の外形が縦長で背勢が強いということが分かります。これは、臨書学習で学んだ「九成宮醴泉銘」の特徴の一つです。「九成宮」の「視」は左右の組み立てから成る文字なので、幅が狭くなるのは当然ですが、払いの形状など「皇甫誕」の「見」と共通しています。

このように做書では古典全体から受ける印象を大事にして、その特徴を確かめ、捉えて表現する必要があります。

次に、過去の優秀作品を例にして、楷書の「做書」課題への取り組み方を確認しましょう。

A II 六段受験優秀作品(做「孔子廟堂碑」)



B II 六段受験優秀作品(做「孔子廟堂碑」)



前頁に挙げたAとBは、おそらく誠実に古典から文字を集字して書かれたものでしょう。どちらも「孔子廟堂碑」を基にして、その特徴を上手く捉えています。

Aの作品は「孔子廟堂碑」の特徴である温雅な線質を十分に捉えています。ただ、字形を整える段階の、「風」や「日」の画間が気になります。その点に留意され、「日」の文字の傾きを直したり「秋」を少し左に収めたりするなど、章法にも気をつけると、さらによくなります。

Bの作品では、特に「永」の字が他の文字よりも大きく、字間への配慮も気になります。集字をした場合、一つ一つの文字が独立しているように見えないよう、注意が必要です。

優秀作品のC、D、Eは、いずれも「張猛龍碑」の倣書です。

Cは、力強く打ち込んだような点画の特徴がよく捉えられ、筆勢も感じられます。ただ、収筆部に膨らみがある「張猛龍碑」の特徴的な左払いを強調し過ぎたためか、運筆が不自然であるような印象を与えています。また、「窓」裏等は、文字の重心が高いということも、少し気になります。

Dについては、「字調べ」が不十分だったのかもしれない。文字の中心よりも左側を広く構える「均衡」の特徴などを確実に捉える必要

があるでしょう。

なお、字調べをしても、その文字が字典に載っていない場合もあります。その場合は、前頁の手順のところでも示したように、旁と偏など、文字の部分を組み合わせる方法を使います。その際、古典の特徴を漠然とした印象で捉えるだけでなく、点画の構成の仕方と線質の特徴を明確にしておきましょう。

Eの作品では、全体としては力強い筆致を捉えているものの、特に横画の収筆が重くなっているため、用筆法の確認をするとよいでしょう。

C Ⅱ六段受験優秀作品(倣「張猛龍碑」)



D Ⅱ六段受験優秀作品(倣「張猛龍碑」)



E Ⅱ六段受験優秀作品(倣「張猛龍碑」)



平形精逸先生は、「倣書に挑むには、どの古典を基にして創作したのが審査員に伝わるかと、つまり、伝統的な裏付けが明確になっていることが重要で、そうでない作品は評価が低い」と述べられています。

(平成27年度実技研修会報告より)

段位認定試験では「倣(古典名)○○書」と書きますが、それがなくても基にした古典が分かるよう、特徴を捉えて書きましょう。

自分の選んだ古典の書風でまとめ、その古典と同じような印象に近づけるまで工夫して倣書し続けると、そのうち、少しずつ古典と重なり切れない自分というものが顔を出すようになってきます。そこに本物の創作の可能性が芽生えるため、「倣書は、創作への大きな第一歩」といわれているのです。

ただ、いくら念入りに字調べや古典の文字の集字をしたとしても、それを手本にして臨書するだけでは、実際に書く時の筆圧や速度、穂先の通る位置や書き進めるリズム等は、よく分からないと思います。

機会をみつけて、日本武道館で開催される研修会等に参加し、「書く過程」についても学ばれることをお勧めします。